

実践事例.03

理系男子の苦手な言語分野。
「ランゲージアワー」で
言葉の運用能力を鍛える

東京私立芝浦工業大学中学高校

2年かけて

言葉を操る技術を修得

工学系附属の中高一貫男子校という特性に合わせ、09年度より始めた授業の二つに「ランゲージアワー」がある。

「日本人は筋道を立てて、自分の意見を話すことが苦手。特に本校のような理系男子はなおさらその傾向が強い。生徒たちには自分の考えを相手に伝える技術を身につけてもらいたいと思い、始めました」

担当の猪又和彦先生は、「ランゲージアワー」は思考技術のトレーニングだと語る。

「話し方は流暢でなくていい。大事なものは、頭の中でちゃんと言っべき情報が整理されること、そして、それが相手に内容がきちんと伝わるよう話せること。そのため本授業では、言葉を操るための技術を修得し、社会に必要な論理的思考力、批判的思考力、複眼的な視点を鍛えてもらうことを目指しています」

現在、中1、2年で実施。ここで徹底的に論理的思考力を培ったうえで、「話し方

講座」(選択)や「海外教育旅行」につなげていく。「こちらはプレゼンテーション技術、真の国際人として振る舞う能力、人間関係を円滑にする能力の育成の場となっています」。

6つのスキルを
スパイラル方式で身につける

「ランゲージアワー」は対話に必要な6つのスキル①論証②再話③情報伝達④分析⑤視点⑥要約から構成される。内容は「言語技術」のスキルに関する文献を参考にしながらオリジナルで作成。取り扱う問題も担当教師で作っている。

授業では①から⑥の順番で、1時間につき、1スキルを学ぶ。このサイクルを続けることでスパイラルに言語技術が上達していく。各スキルの内容は次のとおりだ。

① 論証

自分自身の意見、解釈を聞き手にわかるように根拠を示して論理的に伝えるスキル。授業ではまず結論を言い、その後



猪又和彦先生

School Data

1922年創立 / 普通科(男子校) / 生徒数(中学校506人・高校540人) / 進路状況(2012年度実績) 大学90.0% (うち芝浦工大進学46%)・専門学校3.0%・その他7.0%

理由を述べるといってトレーニングを行う。

② 再話

耳で聴き取った物語を自分の言葉で文章につづるスキルを養成する。書く速度が向上するだけでなく、多くの文章・文体に触れることで、物語の構造を理解したり、さまざまな語彙表現を身につけることができる。

③ 情報伝達

自分が受け取った情報を相手にわかりやすく伝えるスキル。授業では、「アメリカやフランスの国旗を見たことがない人に、言葉のみで描写させる」「駅から学校までの道のりをお年寄りや初めて来た人にかりやすく説明する」などといったことを行う。

④ 分析

絵の中にあるさまざまな情報を取り出し、それを分析解釈し、論理的思考に基づいて自分なりの考えを組み立てるスキル。授業では絵を用意し、「描かれているのは朝か夜か」「この人はどういう人か」などといった具合にその内容を分析解釈する。

⑤ 視点

ものの見え方・考え方は人によって異なることを理解し、複眼的・多面的分析力・思考力を身につける。例えば、交通事故における加害者と被害者の立場を説明し、第三者の立場で事故について考えを書いてもらう。

⑥ 要約

情報を簡潔に提示するスキル。具体的には、物語のあらすじを限られた文字数で書いてもらう。キーワードを抜き出し、接続詞でつなぐ手法を徹底させている。

授業の最後には必ず
復習のための作文を実施

授業は教師二人で担当。最初にワークシートを配り、その日の内容を説明する。授業は基本的に生徒が主体的に答える形式。特にゲーム形式を採用している。「男子は競争が好きなので、ゲームにするとおもしろがって取り組んでくれます。」「論証」の授業はたいてい問答ゲーム形式



ランゲージアワーの様子。授業は50分。少人数のグループに分かれ、自由に意見を出し合う。

取材・文 / いのうえりえ

図1 芝浦工業大学中学高校の言語教育の流れ

1,2年	ランゲージアワー	「言語を操る」技術を身につける。
1,2年	英語総合	少人数クラスで多様な角度から英語を学ぶ。
3,4年	話し方講座	プレゼン技術を身につけると同時に、人間力も高める独自講座。
3年生全員	海外教育旅行(アメリカ)	外国の家族との交流を人間的成長につなげる。
3~5年	中国・韓国語講座	ネイティブ講師による教養講座。
4年生希望者	ニュージーランドホームステイ	ホームステイ・語学研修を通じた異文化体験。

※1~3年は中学、4~6年は高校

だ。「結論を言って、そのあとに理由を言う」「主語を必ず入れる」「整った文でこたえる」「質問されたらすぐに答える」といった制約を設けてゲームは進む。「どちらとも言えない」「わからない」「何となく」「微妙」といった日本語独特の曖昧な表現はいつさい禁止。それによってよりクリアに物事を考え、話せるクセが身についていく。

そして、授業の最後10~20分を使って必ず作文を書いてもらう。授業の感想ではなく完全に復習だ。「あなたはゲームが好きですか?」といった問答ゲームをしたあとだったら「あなたは宿題が好きですか?」という問いに対し、結論と理由を簡単に書いてもらう。作文の効果は高く、「生徒はほかの授業のレポートも理路整然と書くようになった」と言う。実際「ランゲージアワーのおかげで文章力が上がった気がする」と言う生徒も多いそう。

「普段の会話でも、結論を先に言い、理由

を述べるということがごく当たり前の習慣になってきています」

実践のヒント

高校で実施するなら
高1の早い時期がおすすぬ

Q ランゲージアワーの問題は誰が作成するのですか?

「ランゲージアワー」は特色教育という分掌が担当しており、そこに属する教師5人で考えています。教科は国語、社会、数学などバラバラ。以前は体育や英語の教師もメンバーでした。演習問題は担当の先生がさまざまな資料などをもとに作成します。2~3週間に1度は5人で集まって内容などの相談、打ち合わせを行い、授業3日前に一緒に組む先生同士で授業の進め方を確認し合っています。

Q 高校の場合、どう実践すれば良いと思いますか?

正直、早ければ早いほうがいいと思い、本校では現在中学1、2年を対象に行っているわけですが、高校なら高1が最後のチャンスでしょう。しかも1学期がベスト。中学生ほど素直ではないものの、高校生になっただばかりという段階なので、新鮮な気持ちで取り組んでくれるはず。理解力は高いので、ディベートなどをするにも高校生のほうがやりやすいと思います。

図2 ランゲージアワー問題例

「論証」の問題例

説得力のある理由とは?

電車と車、どっちが便利?

問1 便利だと思うほうを頭に浮かべてください

問2 その理由を2つ以上考えてください

問3 問1と2をつなげて文章にしてください

〈ポイント〉

この問題は、理由を深く考えるトレーニング。「電車は車より便利です」だけでは、電車についての印象や感想を述べているだけ。「なぜ」便利なのかという理由を加えることで、聞き手は納得し、賛成してくれるようになる。例えば、「電車は座席が多く、座って目的地まで行けるから便利だ」「電車は自分で運転しなくて良いから便利だ」などである。授業では少人数のグループに分かれ、自由に意見やアイデアを出し合うところからスタート。いわゆるブレインストーミングと呼ばれる手法だ。これは小論文やディベートのスキルにもつながっていく。

「視点」の問題例

もの見方を変えてみよう

短所も長所も同じこと?

- ①うるさい ②おせっかい ③くどい ④生意気
⑤優柔不断 ⑥あきつぱい ⑦せっかち ⑧消極的
⑨頑固 ⑩主体性がない ⑪自己中心的 ⑫神経質

問1 上の言葉を長所に置き換えてください

問2 自分の長所と短所を考えてみましょう

問3 自己アピール文を書いてみましょう

〈ポイント〉

この問題は、もの見え方・考え方は人によって異なることを理解し、複眼的・多面的分析力、思考力を磨くトレーニング。

問1の模範解答は以下のとおり

- ①うるさい→にぎやか ②おせっかい→面倒見が良い
③くどい→ていねい ④生意気→自分の意志がある
⑤優柔不断→慎重 ⑥あきつぱい→ものにこだわらない
⑦せっかち→行動が迅速 ⑧消極的→謙虚・熟慮する
⑨頑固→一途 ⑩主体性がない→協調性がある
⑪自己中心的→リーダーシップがある ⑫神経質→繊細

長所は短所と表裏一体であることがわかるはず。授業では「長所は具体例を挙げながら」「短所はその裏にある長所に結び付けながら」説明するトレーニングを、自己紹介や模擬面接を通じて行うようにもしている。